

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

新しい年を迎えるにあたって、我が国が直面する大改革に対して、如何に対応すべきかを考察することにする。

それは、環太平洋経済連携協定（TPP）への我が国の参加の問題である。最大の問題は、過去に我が国が結んできた経済連携協定（EPA）とは異なり「関税の原則全面撤廃」であり、ハードルが高く日本農業は壊滅的な打撃をうけるといわれている。

それは、米に対する約800%の関税で保護されている現実が代表例としてあげられることなどによる。

ただ、経済活動における国境が無くなり、グローバル化が進んできている現状を考慮しないと、アジア太平洋の経済成長を我が国は取り込めず没落することは目にみえている。

無資源国日本は、好のむと好のまざるを問わず貿易立国でしか生き残れない。

過度な農業保護のために、産業界全体が活力を失っては我が国の将来はありえない。

「関税の全面撤廃」のTPPの方針に対し、異論や姑息な手段にたよることなく。農業の抜本的な改革で攻める農業への転換が急務である。

仏教の基本的な考え方「四法印」を学び、世の中は常に変化し一切の現象的存在はすべて苦であることを知り、変化する環境に挑戦し努力することだと思う。

又、「舒緩、唯善、唯浄」の教えを知り、「あせらず、怒らず、こだわらず」で泰然として困難への対応をする心を持つことだと思う。

実践にあたっては、「自我作古」の教えの如く、「我れ自づから歴史となることを作る」いわゆる、前例が

ないことに挑戦する^{きがい}気概が必要である。

そこで、「四法印」で諸行無常、諸法無我、涅槃寂^{ねはんじやく}静、一切皆苦^{いっさいかいく}を学び苦難や困難に耐える考え方を知り、「舒緩、唯善、唯浄」で邪念をしりぞけて、「自我作古」の教えで、挑戦、努力、結果自然成の精進の道を進むべきだと思考する。

それは、変化を受け入れ、対応し挑戦、努力する考え方であり、戦う前に敗れ去る考えを捨てるべきだと思考する。

それは、我が国だけが難題にたちむかうのではなく、環太平洋経済連携協定（TPP）には、すでにアメリカ、チリ、オーストラリア、ニュージーランド、ベトナム、シンガポール、マレーシアなど交渉に加わり、韓国も参加を表明している。新しい世界の流れに遅れないために以下、対応の心を考える。

2. 四法印^{しほういん}を学び生かす

仏教の教理を特長づける四つの根本的教説に、四法印という教えがある。

それは、諸行無常と諸法無我、涅槃寂^{ねはんじやく}静、一切皆苦^{いっさいかいく}の四つの言葉である。（一切皆苦を除いて、三法印いわゆる仏教の教えのしるし、標識、根本的教説をいう。）、それぞれの大意は、

「諸行無常」とは、一般的に多くの場合、人生のはかなさをなげく意味としてうけとられているが、「無常」のサンスクリット原語はアニティア（Anitya）で、常ではないとか、非永遠的、一時的などの意味をもつ言葉である。

この世において存在する生きとし生けるもの、それらの世界は、すべて時の流れに逆えず、共に移り変っていく、いわゆる変化する現象を超える固定的な実体は存在しない。しかし限りある生命に無限の価値を見だして精進し、努力して変化向上する可能性があるということを教え示している。

「諸法無我」とは、如何なる存在も永遠不変の実体を有しない。いわゆるすべてのものは、直接的、間接的にさまざまな原因（因縁）が働くことによって生じるのであり、それらの原因が失われれば直ちに滅し、そこにはなんら実体的なものが存在しないという物の見方、考え方である。

「涅槃寂静」とは、煩悩、いわゆる人々の心身をわずらわし悩ませる一切の妄念の炎が吹き消された悟りの世界（涅槃）は、静かで安らぎの境地（寂静）に達するということである。

「一切皆苦」とは、一切の現象的存在はすべて苦であるということ。いわゆる四苦、八苦の世界であるとい

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪（野風生）
雅号 樹泉